



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN

14
699

三十七全傳古夢南柯後記卷之二

前快集第二

東都

曲亭馬琴編次

冬因の晚稻

苦へた。病。とてまうの立あたて。寝るともあがぬよ。玉の夢。まうみまうきこと。形みた。身とうち歎く。全みが母刀。自へやうやくに羽を起を成。あへかひくちく勤め枝。母はよつるる夢を見て。づ。魔きよひよる。おねへ何とぞ。と問慰。ばうち后に食へた。よ吾体の病著。毎月にまづい員債。と。勸解つひひも。延れど。本をだつたりや。なまく月睡む夢ふ。討債鬼。は債らまう。かん身の出くつまざ帰ふ。寺町の四五六ぬ。例のこごと。ご病りて。吾僻ひづるさんをようと。討債鬼。と詐欺て。櫛と昇りて。まます。そへありのと。喉くせ。胸苦く。声の渇く。

る辱嘯と喚が声の現みてあつたる所は正しく云ふ魂の才や生る
事あるんじくんせよ在りひもうた人の眞よ翠より入らせぐ。ちんすが肩も
体ぐ。願ひの西方浦陀如来迎とせてめへせ。どうらみみくも霜不傷む。
作の落葉うた口説爰物うて全みへゆもあぞうち笑ひ。まうたと宣ふす。
爰も移ふ人よおそれがよや。まよ泣りのへ見て後人の食塵すと。阿
と世あひひりて侍う。あれをいこが母の病ひちこす。栗りふめでえ爰
ふ侍うや。やうふ條る負債あつとも。天道の人を教ふと。こう誠よ稱ひうべ。
神も守す。仏も護す。發跡時うみだやへ返すと。うべ負債も某
うみだ。只緩ゆに保銀へ。花す春不あひき。極乐淨土へ住すとも。ごんく
かうりのゆうけべづと赴く旅うど。と諫とが目拭ひ。現も吾儕の
愚癡うじ世とが捨ねど。せよ捨れて。貧苦よ浮堪ぞ元を急ぐ。放と
うみづへて病あど。人ひみのとぬ孝りをほしてたまふる。物ひう
讓うも與ふ。親の貧乏受けて。生まで祝ふ。壯佼ふ。や劬勞とをもよと
又酸鼻親の慈悲と憲よ拜そ。茫然と笑。ものもうひふ。屏へりひそ。
望の薪の價借んと。友どう許ゆれられ。夥の物こそりと。うづ称。
まづまれをりてゆひと。耳掻もせぬ。五百。舍利のやうう茶ス外。惜元
もなくとじう。是下あれば十日あまく。腹鼓うて過ぐ。これよりと
いひうて。被の隅引らど。母のほどう。寄せが。それへこよみ。僥倖す。うふ
浪速の浦より潮のかたへ浮世の人云。然すをかうで信ふ。五縁の残
何人す。ゆそん四五六の。秋暮。伊市。と聞く。承よ理。五縁の残
を。下ふ布する紙牌。と。んかう。肩を顰め。施行を。青縁五百錢
白糸文殊。大和國縁井の家臣。赤根半。え。蝶松曾太郎。か。寫せん。

あう身ぞ。全みちん身ミこの輩ミとよ一歳ミととへる。秋ミと同月ミとそへ。
とぞうに。回カクそひつゝれから。小裏ミめどりと法施ハセ承キテせセどと
うちの騒ヨロシがぞり。赤根アカネとやん蟻アリ松マツとす。アリ喫ミり。傍カタぬさう。被ハ
破透ハラス。漏ルる水ミ紙シ田タとて。友アシだらうとしシ。反故ハシゴをばの取ハサウ。まくさ
うへいひど。といひうじとばにを掉ハサウ。それへ偽シラうん。裏ミ水門邊ミと見る
等タガ。のからつゆくを。吹ハしこへ千日墓ミと施ハセり。物夥ハシゴを多ハシゴ。旅主ミ
大和ヤマトの続井家ミと。第一の執柄ハシゴうと。今ハシゴの世ハシゴと稀ハシゴ。大檀那ミ
とある。といひとぞひうをそれ。こまへ施ハセ行ハシゴの本ハシゴ。且ハシゴ闇ハシゴの煙ハシゴとくねて。
乞ハシゴ食ハシゴをもる。在ハシゴひよれ母ミが病ハシゴ著ハシゴゆゑ。無ハシゴべんやとて叱ハシゴる。あうねど。
臥房ハシゴの障子紙ハシゴ破ハシゴきて。隔ハシゴる。親ハシゴりふるふ。うごやうらありて。如此ハシゴふ
あり。といひあはれて。のちつね。首ハシゴへかせど尾ハシゴを隱ハシゴ。施ハセ行ハシゴの牌ハシゴの一言ハシゴ一文ハシゴ
用ハシゴひき身ミとす。とぞうとも。あづきの次ハシゴ今更ハシゴ悔ハシゴて。かく。歟年月ハシゴを僕ハシゴる
のこすづき。とかれに詫母ミの憾ハシゴと。全みちん身ミよあをて。いど。面ハシゴ向ハシゴうけり。且ハシゴて
母ハシゴ駆ハシゴ。やく。臥房ハシゴと。今ハシゴみが。紙シ推ハシゴつ。上坐ハシゴ。推居ハシゴ。全みちん身ミ
迷惑ハシゴして。云何ハシゴとちりふ。物ハシゴ持ハシゴ。と忙ハシゴ。舊ハシゴの如ハシゴよそんとも。死理ハシゴ
そりて葬ハシゴ。膝ハシゴより。手ハシゴ涙ハシゴと。湛ハシゴ。襁褓ハシゴの中ハシゴ。娘ハシゴひそて。氏ハシゴ姓ハシゴも告
あうねど。吾ハシゴ稱ハシゴと。实ハシゴの母ミ。と。おのせけ。ハサモヌ。罪ハシゴと深ハシゴ。とあへれど。
ひひハシゴ。然ハシゴあよ。す。でも。告ハシゴ。施ハセ行ハシゴの二字ハシゴを。繰ハシゴ。海解ハシゴ。

旅室を誰ともあらずて。親あれ匂そ袖乞の墓あれ物を戴る捧て取る
色ゑりて來り。ひこうのを多痛て。言あらかれてかへり。すく怪え
氣べふ。吾偽の實の母ふあらず。乳母晚稻とゆきてり。お身。耶公
太和半國伊賀半國を踏ちめり。続井殿の善代の家隸。今市全八郎と
ひしん。尚壯の年。しづきと酒とよ身をやり崩して。武士の行ひざま
みじ。あるに當主伊賀以殿吉稚丸。ひそひそ西瀬で京師と往来
供み。今市赤根布施の三人ぞ。吉稚弱少るをりて。全八郎へ同え
求る。布施蝶九郎と相譯て。主居を濡酒。賃金を進せ。剝主の要金を夥
横領。あはれ。事終。發覺す。布施りうとも。禁獄せられ。苛く余を助けて。
大和を追放せられ。とゆえするの。往方。あらず。往經て。あらず。全八郎
恥をも。者ぞ。馬を牽轎と昇る。浮雲々と。うららぬ。行
と。と。彼蝶九郎。りう共よ。浪速。ひきかね。故明車。あらね
生の。黄金を奪ひ。その妻を。奪ひ。きんと。せ。殺。忽地赤根。追迫。うと。
時へ。亨禄元年。季冬六月の。河風寒。霜。夜の。冰の。奴よ。辟刀。を。
赤根。あはれ。よ。當時の。風吹。この。津よ。ひきかね。因果。めぐ
あひ合橋の。下。やく水。くらね。と。僕と。びり。か。や。廿年。あす。三。う。の。遠
夜。よ。當り。か。よ。ア。と。これ。ひ。爺。ムの。う。あれ。又。母。は。前。へ。全。八。娘。と。結。び
定め。妻。あ。と。う。が。華洛。六條。う。刀研。同樹。と。う。人の。じ。を。め。名。と。ぶ
増穂。と。ま。う。セ。ア。幼。稚。より。歌。舞。音。曲。と。坐。屋。夏。よ。習。ひ。つ。の。伎。よ。
あ。ま。う。が。舞。端。の。異。名。と。小。夏。と。呼。と。叫。と。叫。と。貴。人の。酒。宴。の。席。へ
す。わ。り。か。よ。あ。し。よ。づ。る。過。世。の。惡。縁。あ。り。け。ん。吉。稚。丸。の。旅。館。あ。る。
舞。端。の。袖。あ。あ。る。樂。屋。が。多。き。の。捨。言。禁。り。て。全。八。郎。よ。蕩。よ。き。

露の情と信。夢は。僅。兩夕の假枕。
ちて。怒。拂ふ。有。名つづく。もの。物を。す。ひ
も。ど。郎。ハ。更。ふ。主。とも。名。告。ば。流。夢
ご。夜。の。冷。さ。か。や。て。もの。後。へ。ア。今。か。よ。と。ば。
又。三。勝。よ。舞。ぐん。と。そ。犯。ざる。科。ス。ゆ。く。へ
あ。と。ぶ。遺。す。像。見。ハ。次。の。春。夏。と。増
穂。の。名。み。ね。じ。木。黒。の。藤。り。と。せ。め。て。
う。も。と。て。み。づ。ふ。男。児。見。れ。ど。恥。く。ほ。く。
猶。又。ぞ。い。と。腹。き。く。う。れ。性。ふ。そ。く。せ。ば。
サ。ト。あ。人。ま。く。し。ふ。鳥。り。き。人。母。に。前。に。面。す。

と。そ。心。痛。て。乳。も。出。ど。祖。母。よ。る。の。ま。ま
ま。乳。ふ。同。樹。ど。の。ふ。つ。ひと。ト。と。ら。へ。乳。母。と
嬰。兒。と。難。育。せ。ん。と。吸。え。く。ぶ。く。と。と。
音。倚。ハ。刀。屋。へ。お。ん。家。の。乳。母。よ。奈。う。よ
そ。か。て。母。の。前。り。身。を。憂。え。て。や。り。い
や。そ。う。て。産。後。さ。よ。か。肥。と。も。ま。る。ど。
そ。の。の。秋。八。月。契。じ。月。も。う。づ。と。
か。と。宜。土。の。旅。よ。卦。す。と。ま。よ。ア。う。だ。折
比。同。樹。ど。の。続。井。家。よ。う。風。流。士



風流女と号られる。阴阴二口の大刀を研て進せよと仰ひられたりあり
ク。家職の面目こよすとて、撃て大和を殺さる件の大刀と研さる。恨て風
流士の刃をつゝ毀さう。と云はばくづる。料されば禁獄せとゞらしよこの條乃
る承る。燒井の執權蝶松どの。聊由縁あひりて、殿のちん憤を申し寛
め。苛た沙汰よ及ばね。同樹どりの悪るく華洛へゆきあひよけど。の
まふ活業せば後の祟もむすび。入幸みて崇あるとも。此度のよとせよ
あれら。京家の武士と誰も亦。刀と研さる。この夕の日。照
りのく代如み。活業とてあし。と尋思て。奴婢みへ身の暇とども。
職と止宅を捨。遠く華洛と去て。筑紫の太へと勤む。すのとをも身
の祖母と。の潛然とうち泣つ。とて吾傭と宣ふや。汝が志とく。ひどう
子の増穂と喪ひる哀との袖。よつまご乾ぬよかる家の難ゆ。今この
孫をつねん。住駒とる。かよ在す。同樹どりと婿く。罵り虚す。力と。
往方定め取旅の空へ。これとる。体で途みて餓死するやあん。隠さと
毛など人をもまれ。と。市金ハと。燒井の家隸。ひく。
流浪の後。往方をもねど。名告あひ。と。親こすり。むざみりで物
を。今懃よと。乳をとて祖母と体。寝て。同樹どり。
翁死す。殺さとん。せの懐。と。お。却孫が幸ひり。よしと。今
火急み。懲て遣を方ゆ。情へかる折を。汝が子とも。もんで放御へ。と
也にて養育。よしと罪あたと。女児が為。孫が為。同樹どり。ふ
そく隠して。年々。竊よかどく。銀六百文。あまつあり。朽木の。頬。ふ
物。えぐもあまねども。千坐もと。程。孫が為。松の。坐ふ。志すと。やふ。
これかで。わざ。町亭ふ。傳ふ。まえひく。巣上の川。よあひ。づきと。られぬ

稻舟乃綱手を失ひ主の零落ふ。やがて涙の水まで。あた歎き不善鬼をさうね
ど。立場されとくけりつ。車も西もさざうぬ。和君を廻て旅か。み浪速津へ
ゆけ后へ経て故主の在所をもとむ。え東吾備又夫ゆく。よしと奉手一筋
船繩の中と夫つて。せよる楫よかと餘ば吾備ハ京の刀屋へ乳母よまぐ
みをのち。ふく。三年の後夫婦ひくよ候取主と又あ紙奉る事ゆみ。至すれあれどやうと
うこの福見をねほこそ。えう賜ふる宝み。とぞべりと可愛み。ふる
きと銀肩がく。右もく脾疳みて骨と皮のミ瘦體減矣苦鉢よもを
竭也。全三年の医師ニ陳。創良人へ時疫みて墓もくもせとさげし。彼六百文の
銀肩銀も残ひ牙室の吉備と福見する。とある人の手もかは。と糸綿繩りく
細き世を渡る寡婦が手ひくよて。すくや小人とろせ。私すへ反晴の若ひ涼く
カヤをよせをぬる族の全みとゆきと。京うちの名あらわしと同樹どのいと憎
げよ。爺はふとそ名ともつかひ。似し人の定うみねば。遠奴よが。豈能の法か
丸と呼むこと。うあれど常不嘆きしが。この浪速へゆく事。冥父全八
どく名の一すと。ふ良人久四郎の名。ひそとく。身の
行ひひよ足すなど。かん身の実父ゆ続井の退糧人を。ひめ彼赤根蛭松と肩と
ひく。同僚るじよ。あくぬみとくひみだらう。そのと生きてうひもる。親うくぬ
親のとあふ。児の中ふ生すく。彼當る船りを受く。常言より。氏えく育ち
れひかん身う失ひ。ひぞ號を吉備。すまき。不幸を歎くふあまう。まれり
かん身がゆきまの実えよ遙すらすまく。本のりくく。すむりのうち。けよ
拳動。ゆびはと。えねうてその素生を告。親の惡る死面と。死がゆくを哀
え。今こそやであれがれ。今宵の中ゆ頼とぬ身の病苦よ。恩終あが。経不
かく身の實の死をあらはのう。りく。や告へ。望へあとせん。と胸うれ絶ね。おゆ

タ。うちもるせ。背がう。こそ驚きあり。苦しき方の恩愛の洋よどを。
禁物あくぬ涙と胸のひと庇あつがよ餘り王や。うあくれらる全久の怒わ
眼裏凄じく。肩搖ち落と息を吻て形えや。父をも。寔の親とあよせと。
仇人の施物をうけらう。神をぬ身こそ悔へけ。これハ野合の孤うりとも。
之の死ひうそびと。復讐の志あり。鳥獸もおり。又の仇う赤根が
黨この地へ寄も集合と。海とび沼が死天の賜。千日墓をりまご半。者奴ホ
がゆくと埋伏て怨と復さん。今骨もあり。よへと遊閑く敗戸棚る。故済買
賣の筋。双の死と。志院ミ健夫が恨の寝又ハモウ。や脱はと腰
小碎。まう生と。行は晩稻の里を遙ひ。追ざぬよ薄振。か。體て裳ア
舊著。や。利手よ。まうと。然めて今刀向ういふと。細吹き。か。身が爺公全ハ
ぬ。赤根の聲をもひく。原を脱はて天罰さん。仇人といふ。嗚呼。トドカ
加旗。祖母さゑは。続井家一の妻。蟻松典膳殿の前妻と從母。さらと
とぞ。お由縁ある圓樹。宝刀の刃と毀えど。汝も乃がぞ。以れ。蟻松
歴の助よ。れ。典膳今へせよ在まと。施物の刺。曾太郎と。安せん。その
子うじ。赤根蟻松の続井の軌柄。両臣縁より縁。せせらて。同胞よ異き。ば
と豫て。安らる。身。と。おもを。なり。善人。と。慈愛。と。うそ。すを
赤根を。慈む。亡父の恩。と。おもを。なり。善人。と。慈愛。と。うそ。すを
と。豫て。安らる。と。おもを。なり。善人。と。慈愛。と。うそ。すを
襟せ。全八ど。の。と。おも。か。され。三才の秋。まで慈愛。と。生。育。後。の。後。おも。
ゆ。や。さき。ぬ火の筑紫の移。尺々。外。で。よ。び。索。て。名。告。あ。つ。ん。と。も。
おも。さき。お。が。口。め。よ。実。の。親。の。枉。死。と。告。て。物。を。も。み。づ。よ。

元も過世の惡報。於禍神の手に懲る。秋かたうの理。とらひ保和年六
ふとよく。歎くにて。すりき。そや。嘯くと。口説。敵く。席薦よろ。塵埃
ま。哽咽。涙。ぞや。せう。全み。張つし。公の檀。弛ねど。日を仰て歎息。
昔の主従。今。の父子。實の母。と。高父。難育の因。と。忘。名をあるとす
らひ。ひそ。さく。ぬ。よ。老の後の病苦。と。看病。う。わ。又。外。よ。ス。あ。ぐ。う。ゆ
らねば。今。の。命。の。情。け。と。ど。父の仇。ゆ。代。替。て。サ。モ。天。と。戴。う。べ。ふ。そ。人。よ
あ。ぐ。彼。蟻。松。ひ。づ。祖。父。恩。と。縁。の。あれ。び。そ。で。赤根。と。放。う。ぎ。二十九年
親。ミ。カ。シ。一。難母。の。チ。病。ゆ。か。の。よ。等。困。よ。及。全。み。が。ひ。づ。う。ても。か。く。り。ね
ひ。乱。ま。う。母。の。教。へ。何。よ。や。ん。等。困。よ。及。全。み。が。ひ。づ。う。ても。か。く。り。ね
者。途。へ。冥。途。の。先。峰。ひ。ん。刃。が。先。教。ひ。れ。先。教。志。す。よ。累。す。三。途。の。河。み。く。峠。と
え。の。山。み。く。車。と。う。り。死。て。の。後。よ。難。育。の。恩。と。ぐ。く。進。じ。これ。今。生。の。辞。別

永樂錢
三貫文ハ
今之金
兩餘小
ゆる故

根闇一田舎を競ひ外の外より利を得る。正もあんらと儀頃よりひよろはありて、望の大神へ記初び辞別せまゆく。又去年の春より、夥計の賤賤木が、二百よやの木築構。私主の母の太病死して、この春より半年あり。藏残一文ばかりせぬ。この月より物主さう。未進以後よ賄せんと賄計鬼ふこうを治さうて。永樂錢三貫の主より既より為課さう。こゑの私うぶ孝行を神仏の憐みそがり護らう。とくべ残の集う果るをやうべ半晌も疾報知て、歎せんとぞあつし。物のふく時節をやうねば、かくとも成就せん。經慮の功をうござどす。されど私うがよくある所づけものありて、可憐日と算さん。彼猿りそみてよせん。門戸鎖て俟ち、誘ひてまんと裳引わて、足らずと去ぬ。當下晩稻の段と擡て、四五六と遙よ月退す。全般何うせりひ。經慮の功をうござどる。而五六ゆく件のゆきとあつて、如些つひつ教あざる故へあらぬ。私うの夷教の真中みそ候か。又聲ねが聲きぬ仇へ彼赤根の続井の執柄殊々親族負を悉て、親の菩提を吊ん高よこの北へ來るるゆき。従者も又多がじ。然るふ和子の草オヤ志の猛くとも、鷄卵をりく石よ擲。蠅蠅の臂を揚て、轍を駆よ異うむべ。うといへらるるゆき。一毛びよごく、紙うりふ禁めせゆど。月とうき年を積も。又隨小餐ぬてこそ、真よ聲うりべけ。吾脩が餘命へつ月もあじ。經慮の功とあるほどり、金言を胸よ差りて、且くちりひがまうり。よおひがまうり。かうでる紙うりゆ。塵りの紙べせんごく。懃途よ生残され。才の憂うがれまえ。又よ伏てりん死す。南堂阿弥陀仏と念佛。全般が後がある。刀とくそ五六す。放逐まんとまうじく。全般吐嗟と撫禁め。あれも物よ狂ひまよ。縱今志を遂ぐる。母を死して何うせん。がく此又と納まく。

きくがるひとすりゆふ。それへ又情き。情きとん和みを。只この傍よ
殺してうづと死を究くる姉母よ。争ひう程て全々へ天うち仰ぎ嘆息。時へ
ぬうびひごけども親の歎みるひきて且く仇人よ頭を繞せん。ころあく
うひゆ。といひく又と食ひしれば晩稻の胸を拊あらじ。そん喫て安心とう。食て
捨て諫めゆ。ものみみ和子の為されば。もうく人と恨みあひ。今鳴蘆
をや入相浪速三街まう巡りて物あくをなす。茶碗を炊てたゞべ
り。とつとてえんつつ施術のあよ。と恨むやうを雄が被色に。眼と
瞼らじ巻と握す。君すの嗟来の食を受す。孔子は盗泉の水を掬ひ。と物
識人の常ともゆ。何ことあ聽解がり。今こそうひあらくな。や豫讓
が舊衣へ買す。仇人の施物とやへ受ん。且今復と怨の刀尖。ひまちや。と
ひとごと。双と抜て赤根が名薄と。二とびニテび剥つぬ。かくも刀よ聲
残の音。いとぞらふ。断離する。祓の隅うなうて。門邊へ撲地と投捨とが
度え降布く。初雪ふ。交す落葉よ彷彿す。とことや。求食堵。辭ろ
分。門口陥と乱毛入り。悲田穀計の毛り。而て千日墓の施年をうのせ。主翁
面ハ添り。とく。与次が手届う。張里が脾疾。そのうな奴よ物をみて。悲田垣下
の一分と。そも足が浅せぬ。新賣を児と引換めて。蔬屋入の酒買を
ふ。と運歩と聞て。前よ進ミ。二三人全々が前後う。腰廻て。うかる。
卷とがて揮不絶。左右に控と投著。まば筋斗を打て。ゆきと跳踰つま
むくと。競ひ暮る乞四百と。右よ柱左よ當り。或の邊倒一端す。とくも。
大勢うれの物をせが。晚稻。ヌクも危く。人と喰く。も鄰家の邊で。故人
すうれた老の身。腰え難て。もゆゆ。全々へ母駄の側杖を。や餐をと。

金次と
たまひて
四五六
お見と
懲も

四五六



之が進退自在り。而敗る。席薦
の縁より跌き倒す。倒す死ゆ。や
應と乞ひ。春の山邊より生む。早蕨
より角繁き。巻きと抗て巻く。浩然
ふ四五十六三貫の猿引持て。喘ぎ走り
氣づ。この形迹よ吐嗟とぞ。辟ふ
乞恩をめぐらす。集子廻よ。しつけ
て。ちよととんと投退す。晚稻ゆ
あり。全ぬも忽地立よ。立ち止め。足踏みし立ゆ。四五六撃て引
拂う。長條の猿引う。ゆ



金次が肩ふ被さりのみ。軍りそ
乞ひよ。鞍棒。一日の怒ふ事や。そ
り。這奴等す。火うち殺さぶ。あり
えりて。みひづりじく。恥のう。そ
恥のう。底や。経慮へ功とほざ。
あきその猿を踏費ふ。そ。因く
この地と遠離。又。そ。恥を隠せ
り。こう。う。う。や。と。友を。うちの。
信と。う。う。青猪ふ。猛き。う。そ
撃され。全ぬ。今更。ふ威。居坐す
禁あ。う。う。身躊躇ふ。四五六。

晚宿とあそら抱き起きて。のち寝ふ。頃そろば全人今へせをも
る。まことに馬とまくはが又四五ちで。安田歎息し。行
馬の友もゆふた。ありひまのまほに達が親切こころふ。差
か。余あくび日かの恩恵をがくもど。懇これと故んとく。連累
み。せれりひそ。坐てあたての跡のとぞれりくすすで。五日傍よ
まうて疾めに絆どつむぐ。と夜を乞見等。と取やうに手と記。
倭燈ろぐ全夕と廻岡んとまうれど。四五六七から開向腰拂く
三人。地旅の裏へ。理よべ。茶釜勝びて發よ。座す姿を。せせせ。
坐てゆく所に。頃まく四五ち。ふうてあ拜む。且
え渡のみうの里住捨る家の情うと。名残は更ふと。明る。難波の
浦のすりあひ。ごえぬ歎きの浪風。とも物憂前途る。

遠山の夕霞

却説敗鐵全夕。みづくら釀せ。殃危も塞翁がくして。結句
まえだて立まくべ。仇と餐よまくも。さうのんりの紙。とぞい。四五
つふましして。家を捐母と肩ひ。その夜浪速と逐電し。大和政投く
也く。移よ。添上郡。今市の郷へ。实又全ハガ。齒家。のぢかて。筒井の
城下へ遠く。て。このれみ足を駆り。愁と窓ふ。便宜。と。壯ろ
裏みて深念。う。聽て。今市。の郷。ふつ西れて。旅宿。とりと。先
ゆく。さす。敵屋と購得て。親よづぐにて。徳と容。役
永樂。三貫文と。充資。と。生業。も。この外。ある。ゑせ。高
稀う。あよ。浪速。みへ。まよ。す。て。せつ。る。便。よ。た。う。かり。一。行
草。も。暮。き。春のつと。も。に。慰。れ。て。や。晚宿。多。病。養。わ。か。づ。

あこごりて臥房を掃ふ。下すと小屋にりとべ。全みへあく飲び。
活業は假托つ。日よく近城へ支加て鞠ふ赤根半々進と寢と
ソジ。晚褐の候ぐ遅して。床又あることをとらうせど。さうれ
彼老嫗も。その性伶俐りのとば。太和へ來つたであよ。全収が
立候を精して。あひふうち歎けど。如此定するのとけり。ば
禁るるものあらず。りく。時よ天文二十年。春二月の頃ととよ
平城よりけ新筒井の館より大和み順傍ぬ。一日赤根半々進隊雲
曾太郎お代召はれて。士庶の賞罰と定ら。車の序よ宣ふ
す。汝達豫てまことどく。近日深谷山よ。夜多く妖光あ。その
氣哉中。起りて。中天よ立の。山鳴。谷震て。草木あれが
鳥よ枯鳴。管林ホガ訴詔頗よこうよかふらひのう。と
昨夕。みづから城櫓み登りて。廻み米谷の方と瞻望。理り通の
赤氣天よ冲て。煙の如く霞よ似たり。あられが色。管林ホガ告とく。
妄誕よあらば。倩物と案どく。とへ此往時享禄三年の春。先考
被ひある。本精の常氏。旗んとて。楠の根よに瘞あひ。つが家の
宝劍。風流士の馬とこうよあひ。和漢の史傳よ考とく。
千早振神の代よ。山田大蛇が尾頭。生る。劍へ常よ雲と起せ
ふ。天叢雲と名つけられ。人の代とありて。日本武尊。草薙と
ゆびえて。樹枝へかけまひして。劍より火りえ出く。忽地。の樹を
燒き。熱田の神と祝とく。又要朝。晋の時。牛牛の間に
忽然と雲氣の立升る。有り。時の大臣張華。とよりの。づ
ことを怪う。博士雷燃。とよりの。よ聞。雷燃答て。これ宝劍の

余ふそ待り。リ一最上の剣。ス一土中ふ理。ある。その
氣の大。よ冲。とあり。疑ひ。すまう。と。つい。く。張華有理。と。い。ゆて
曉。う。て。強。て。雷熾。と。豐城の令。と。して。伴の怒。遣。せ。小雷熾獄。金の
基。と。堀。て。一の石函。を。造。う。周。より。岡。を。こ。き。と。見る。内。よ。両口の宝劍
あり。銘。と。刺。みて。龍泉。と。ひ。太阿。と。命。く。み。夕。牛。の。間。よ。幸。け。
紫氣復。え。え。そ。ざ。り。・雷熾。へ。南昌。西山。の。士。と。て。即。これ。と。拭。そ。る。み。
上。ゆ。る。た。宝劍。され。ば。京師。へ。使。と。遣。そ。て。そ。の。一。ロ。と。張華。ふ。と。一。ロ。と。ぶ
瀆。よ。や。あ。そ。お。の。ま。と。れ。と。帶。す。う。と。ぞ。龍泉。太阿。の。二。ロ。へ。干将。莫邪
の。劍。と。見。う。文。の。道。み。疎。う。な。半。と。進。ぐ。為。か。説。ば。祝。迎。の。出。の
説。經。よ。似。よ。れ。ど。さ。る。和。漢。の。例。と。わ。り。ふ。よ。つ。と。も。か。と。き。る。み。が。ら。
先。孝。附。陽。師。の。言。榮。代。信。じ。て。家。宝。の。大。刀。と。あ。く。も。深。山。よ。瘞
も。ひ。う。と。う。今。下。至。て。二十。條。年。遂。よ。入。間。よ。ゆ。う。と。う。され。ば。彼
大。刀。不。靈。あり。て。主。と。暮。ひ。光。を。頭。す。され。て。て。曉。下。ど。ひ。是。と。ゆ。疑。る。
却。そ。の。崇。や。く。年。を。進。へ。望。つ。と。り。そ。不。谷。と。卦。と。彼。本。猶。模。と。掘
鑿。と。風。流。士。の。大。刀。と。う。ま。き。あ。く。と。件。の。女。火。も。お。の。づ。く。滅。つ。ト。
努。く。懈。る。と。あ。う。れ。と。大。息。吹。て。宣。へ。ふ。ぞ。赤。根。蠟。松。面。と。あ。り。且。く
圓。塔。ゆ。せ。ざ。り。が。酒。ち。郎。へ。ま。進。よ。舍。新。く。小。猿。を。モ。ら。殿。の。宣。の
そ。る。火。否。や。あ。る。か。れ。り。ひ。ど。當。初。先。尼。は。宿。士。の。宝。力。と。瘠。め。て。本。谷。山
あ。う。本。稽。の。紫。素。と。壓。り。ひ。る。よ。う。尹。翁。弱。少。の。お。ん。と。な。よ。と。う。ま。也。が。と。れ
き。の。手。あ。ん。と。ぞ。ら。ん。ひと。憚。あ。る。ヤ。シ。像。と。ひ。ど。ゆ。ひ。一。永。正。の。不。先。君
茶。亭。を。造。と。ん。と。て。良。初。と。赤。あ。う。彼。茶。谷。大。楠。樹。と。伐。と。ほ。り。ひ
う。と。の。火。與。ア。行。ひ。よ。赤。根。貌。不。か。う。と。が。ま。そ。君。の。ま。く。み。の。家

あつて。ひ又子の間快らば。既よるのやくとせ。徑よ。これより赤根半を進
まうから。うとうて先君忍地猛き。とこうと御く。彼阴阳師がすまは
及厚金三郎太夫がかく承みとうて。すやく無異よおさり。遂ふ
移ひ。やう二口の宝刀。風流士。風流女と減せんと。華清六條の刀研。
同樹とくつさりの坂。坂下。ゆりよ。同樹失て砾石より中。阳の大刀
よ。風流士の刃尖と疊鍔。これ狂ざる。鐵度よ。と。捨別の恩免と
加られ。同樹とそがやす追えられ。小。彼りのひく。蓋てや。京すも足を
まわ。風流女と二口のぐら。瘞んと定め。むるるよ。先君と情を
駐めど。妻る紙を逐電せよ。その比風算ゆひ。豫て。風流士
風流女と二口のぐら。瘞んと定め。むるるよ。先君と情を
まわ。風流女の大刀を首め。とのびとて。身外よ。瘞め。べき
タマのあきり。風流女の大刀を首め。とのびとて。身外よ。瘞め。べき
り。や。あると。室庫を索。と。身外よ。瘞め。ひ難て
門。門師。よ。如此。このよ。と告。両口の大刀を残。まく。瘞へ。と。まう
みだ。阳のうへ刃尖も。毀と。されば。この一口を瘞んと。や。う。吉凶。り。ふ
と。問せり。よ。彼阴阳師答て。まう。阳の大刀の刃の虧。と。れるも。
物の怪の所為で。ゆる。あつて。に。う。身者。あつて。門の大刀と。首め。う。
壓勝の術。ゆうひ。う。ゆう。大刀へ。眼前。あつて。後の。蒙。まく。ひき
ぬ。と。か。か。よ。独疑。と。よ。用ひ。ひ。き。ね。が。乞。逃。な。べ。ぞ。柱。一。刀。と
箇。め。ん。と。よ。く。が。塚。の。や。う。コ。ニ。基。の。壳。金。底。立。嚴。嶋。の。辨。財。天。と
志。貴。の。鬼。波。門。を。訪。猪。と。あ。く。と。べ。後。の。殃。危。と。行。方。よ。う。も。も。か
と。あ。う。う。ん。と。れ。則。辨。財。天。へ。風。流。女。の。大。刀。ふ。代。鬼。波。門。天。へ。風。流。士。の
刃。の。毀。て。と。補。よ。の。口。の。想。と。へ。憂。情。の。す。う。う。の。す。う。門。の大。刀。と
箇。め。ん。と。よ。く。が。塚。の。や。う。コ。ニ。基。の。壳。金。底。立。嚴。嶋。の。辨。財。天。と

と真言憚るきも。す。捕がごくに勘とう。抑件の陰陽師。博古の
ゆえをう。す。南朝の天皇北島殿の廢流す。村上寢室と略記。
數せ清貧と樂て。南朝よ賣ト。壁より餉ふ。と。ト笠脱相ひ
妙ある。我朝あて奉親晴明漢土あて京房郭璞さんど
と。これよ加ざうへらべばうしが惜む。寝室へ身をうりてをや。十年ふ
あすりゆひるん。す。と。先君件の勘文を半へ信し。半へ疑ひ。遂に
風流女の大刀を箇て。風流士の大刀をのみ。不谷よ瘞まく。本猪塚の
東西よ二基の充金と達字て。嚴鳴の辨才天女と。志貴の毘沙門天セ
訪諸よみひたり。この名をや。君臣和順。赤根の天拳の名まく。揚て東
の家を起。館あ福のもうらづひて。槐姫へひめうけど。大内殿へ
入輿。よりこう。義隆豫て當家の童室。風流士。風流女の両刀あよと
まじ。召乃。婚縁の叙となりて。只顧懇望。と。先君これと推辞。と
そ。うち風流女の宝刀を。女脅引出。と。大内殿へ贈り。かく
あつて近曾故ありて。件の宝刀を。執權陶晴賢が。主君大内殿ふ
まじ。賜ぐ。極意を。竹。吹。かま。と。大内殿へ贈り。かく
ろいあく。りべ先君情。と。箇あり。風流女の一刀も。遂よ當家小
室。と。遠く大内家の有とうと。而从あると。そ。彼。嚴政の
びんの。おから。まね。加旗彼室刀の。刀。殿。と。刀屋同樹も。
毎三。内殿の所領。ふ。あり。加旗彼室刀の。刀。殿。と。刀屋同樹も。
まき。みを。うそ。裏。ふ。都。と。遼電。と。今。周防山口の。内。と。在と。欽。告。る。りの。いひ。
れ。も。又。左。う。げ。右。葬。こと。う。ひ。あ。の。る。の。こ。よ。物。の。怪異。み。の。ち。を。き
み。ひ。ぞ。先。君。の。ひ。志。み。も。情。う。あ。ひ。て。件。の。木。猪。塚。と。發。と。宝。刀。と。や。う。す
あ。う。と。日本。の。賢。た。じ。う。ふ。齋。ま。も。ひ。と。物。使。は。國家。將。よ。與。と。

もるより死へ必禎祥あり。國家將よ亡んとする所へ必妖孽あり。著急ふ
見人ヨリ四體ヲ動く。齊王ニの善言をりて。聖慈退くる。三度とつり。
發家のよれ努力ひどす。又ひて。本谷の両社へ幣帛を進ド。又
奥福寺の大衆と延清と禍胎を禳一タウニト願く。ことば
道理を述。面を拂して諫ク。諸侯ニ争臣ス人あれば。亡道の恩とのども。
その國を失ひ。聖諸もニユリ。いある。降松が誠志の死。あれ遙ニモ
まう。高き操ハ題エテ。順勝え茶大度。ふと諫を容る。と葵海の如く。
是れ紙判斷。もと。流を決する。如く。うしが。この時先代の餘殃。うし
崩ベキ因累。ナア。うそ。忽ち。まふ。裏。童扈役。よ。金。刀を
男。あこ。・。お。取て。反うち。ナ。され。曾太郎。汝が賢氣。婦。女子。怨ハ。説べけ。ま。ど。
非情。ナ。彼。茶谷の老精。既に伐ら。而。舊物。持。ま。ど。や。家
もと。と。ひ。や。鬼魅。罔西。と。つ。り。の。あ。そ。彼。木。よ。お。て。奇怪。と。み。そ
と。も。これ。は。是。領。ま。う。且。武。と。公。國。を。治。ひ。の。武。德。ス。テ。え。も。宿。せ。す。され
劍の矛を衛り。人を征。威。徳。信。を。神。筈。の。一。種。ナ。よ。陰。陽。師。よ。説。惠
え。家。宝。の大。刀。を。女。しく。も。お。中。に。埋。め。ひ。の。忍。あ。る。と。あ。が。ら。こ。と。全。く
え。考。の。ん。悟。こ。そ。を。お。お。う。れ。な。い。つ。と。う。れ。が。慢。よ。大。刀。を。埋。ん。と。お。ひ。ゆ。ひ
任。し。風。流。士。の。刃。を。毀。う。され。被。圓。樹。と。や。ん。ね。能。あ。り。の。と。笑。う。ふ。よ
草。も。ひ。う。亦。是。件。の。大。刀。ど。も。と。失。ひ。か。ひ。な。よ。あ。と。ひ。や。か。て。え。づ。と。ふ。も
祥。の。よ。く。ね。べ。玉。枕。と。娶。う。て。よ。う。夥。の。年。を。狩。よ。け。れ。ど。日。と。ふ。と。ふ。の。火



彼宝刀は機とが物の障壁す。あく。禍と壓。福と殖る。よしと。あつてやせん。
さん。食さざや。とある。ぬ。月の柳のふ。緑つとも變へた良辰より。縣にて
順拂り。握りらるる刀と放ち。微妙も。まごと。まごと。刀と。をすすりと。汝よ
せん。ゆか。計ふべ。斧谷へ程遠く。長金錢。かく。ひて。けふ。と。日も
廻。望へ。早ヨテ。彼れ。赴き。麓の樵夫。管林あれ。尼集合。嫁と。渡き。大刀と
取。と。第。二日。と。過。ぐ。と。だ。こ。う。る。う。と。宣。べ。半々。進。蔓。尔とう。笑。も
青海原の底。う。と。握り。獲。が。れ。と。も。あ。う。と。壽永の乱。と。失。う。と。日。の
御座の御歎。あ。と。ば。埋。る。宝刀。と。取。る。囊の物。と。取。り。易。と。が。き。と。
ひ。と。う。と。旁。と。あ。る。と。熟。ま。して。賜。ア。と。刀。と。鞘。ふ。納。と。べ。順。拂。故。高。画。ふ
ゆ。う。れ。よ。と。が。吉。を。ふ。結。と。う。と。退。ア。そ。猶。ひ。ゆ。と。て。刃。の。眼。と。う。と。簇。て
綯。と。ま。す。と。が。前。右。郎。と。遠。く。土。の。袂。と。引。箇。と。す。れ。み。せ。そ。と。振。拂。い。
え。く。り。も。セ。じ。後。堂。へ。席。と。蹴。立。て。入。り。り。ハ。後。方。又。假。し。小。扈。從。の。男。童
ら。ア。三。入。り。と。若。く。一。げ。ふ。身。と。起。し。両。執。權。ふ。然。れ。と。もの。く。主。ま。ま。す。る。
曾。太。郎。ハ。今。ま。ん。諒。ん。よ。ゆ。熟。よ。赤。根。か。う。汲。う。移。と。彼。み。ち。か。う。ぬ
み。ち。の。の。ち。の。塩。龜。我。う。ふ。胸。と。煙。の。ね。と。ひ。つ。と。ゆ。く。す。替。ひ。も。う。
あ。べ。嘆。息。あ。く。じ。う。半。き。進。ハ。襟。う。た。福。ひ。い。き。く。城。松。ぬ。退。生。き。と。ひ
う。け。と。あ。ぐ。と。ど。紙。推。禁。り。且。く。ひ。赤。根。生。日。來。の。初。ひ。ぎ。氣。ふ。僻。き。
端。り。て。君。の。非。と。傍。に。邊。の。底。意。量。り。び。抑。米。谷。山。の。木。猪。の。家。へ。一。朝
り。見。

一。タ。の。の。う。ん。や。み。の。濫。觴。へ。邊。の。親。う。半。六。郎。竊。ふ。一。己。の。榮。利。と
謀。り。彼。捕。と。伐。マ。ト。千。日。墓。の。夢。と。覺。い。その。夢。あ。か。ふ。家。え。連。田。景
せ。ず。れ。て。養。母。と。喪。ひ。又。典。ハ。脳。が。道。世。も。こ。な。れ。也。と。お。み。す。一。ト。と。び。ひ
か。そ。れ。一。ト。と。び。ひ。う。ら。わ。ど。更。よ。と。び。ひ。死。昔。と。今。よ。り。返。と。彼。外。の。奴。氣。と

誰うるむ。安とこところむる死りのと棟梁の臣として大禄を食うがも。
邊へ一言も諱あらずば。塚を發さ。宝刀を取る。もん使をうけたり。嬉しく
自らとぞうるむ。居とすらしに邊といひ。云外急地に入りつて。物を推道理
ふ背く。これも本精の事あて。慘忍主従が皮膚ふきみ入り。かまふ狂むる
欲。これかすてぞ高く。忠孝の名を揚げる。邊されざるあじ。居よらず
ての同僚なり。アグ私内々争ふ。滑よろく。首あうと。コレは匿るべうも
あうと。寒ふ茶谷卦。塚と發さ。宝刀を取て。ゆきまどとぞひき。欲
つづく。と小膳をとあ。眼つめする忠臣の歯。ふ衣ふせぬ言の撃へい。
涼く吹ゆき。ゆくやえをうだ冷笑ひ。物へや。塙ね生。茶谷よ元のうと。
本籍の紫教宝刀の紫教神。うじばれある。うじばれ楚とおひ室ね
茶谷。おそれて眼前。君の命を背く。死の急地より。この身。市ふ
華ふれて妻子へ路頭ふ飢つて。又半赤半青の袖と伐て家を身せざ。
弓が為ふ。彼舊根と。桂錢樹と。うふのう。うそそ。茶谷懼ん。只。恐びま
主令と否とも掌よゆひ。や。米谷へのむん使仔細。ア。圓答もあ(ぞ)。
ふうび立と。手も果ざ。刀の瑞樹。うけて。袴の裾と。櫻。を押面。漢の玉葬。ハ
士よぐ。舜の田氏。比周。そ。乞役國家を奪す。よ至す。大臣と。うひの外奸。侯
王。を。通家。の好の私。の。佞人を。奪う。う。扇と。扇。を。推。と。坐。と。敦。園。あ。く。身をひきして。抜。か。る。刃。を。下。と。回。扇。を。ひき。推。と。坐。と。
右。身の隣。を。沈。ほ。て。勢。ひ。猛。く。又。抜。か。る。瑞。と。絶。で。捺。う。と。矛。と。突。著。て。破。と
坐。と。す。ひ。も。せ。ば。余。も。情。ひ。と。す。も。か。く。も。君。の。鳥。ぬ。捨。び。を。余。と。い。づ。く。

邊と正れど同士黎せば其とちにとつへまく。日本へ物よ甚忍び溫和乃
翁を浴一様ねぬ。一日の憤小事の虚実を問も定め、それと聲をとす。
き。こゝも本精の常よこそかづその夕を納めりと騒じて怪ね太丈夫取る
瑞とす。放せば脣左郎ひよしを放さば刀を衝とて膝を打。あらゆる
表裏小袖す。君の為ふれ家と忘却令も経て惜くとばとろべうど一の
諫言のあらまじ日未ハ物よ忍びとも。今これとすも忍びべく。何よりうそ
主家の安危の心す。りづふ不理あらが。僅は令と助くべとつらせむ
あらじ。半々進へ扇をあげて音つと高と推禁め。おもづく後方す。紙門を
かきこまよ様ねぬ。事成就するまぐ妻ふゆふゆもせ。とちひ定む
ひじ。御邊の恨むかうく。この方すとうちあけんをと末期の一匁とす。安
らうてすひ稀とつべ脣太郎眉根とよせ。如些坐てて公力とす。およつと
らうじも。額よ額よ寄され。半々進声とひそす。悔そかすぬす
あらう。余谷山ある楠と伐らる。禄をぬる。又幸ひへ幸ひふ。駕子
沈淪浮浪と三勝まよ。飢渴よ苦しき當主也。一旦伝へず。購られて沈淪
あらひ。又子の間快く。剝又と姑の枉死も物の祟るふ。これの不測
を余す。長臣の列ふかづれ半百の齡ふ至る。君とえど賜られ。このつ
せうすよとも。寧不忠を存じざき。あらにその比。村上駕室が勘文の旨
住まれ。先君遠く風流士の宝刀をりつて本精塚よ築籠ぬひうぶ役
崇彌りえ。君臣す異を浴て。宝刀二口を埋んと。いと惜きやせうふ。役
柱て風流女の大刀を盾めどと。強よ大内家。塔引出よ進らいもひつ。
是より先よ駕室が隠よつてあり。堺井殿懃よ陰陽の大刀をさうそ
その一刀を埋り。物の怪全く薄きど男女の間よ不幸也。加旗残し

尚す。内流女の大刀も又その主よ禍とて子孫断絶をひきん虎を画て
猫と顔で続井殿の名瀬の紫苑後よちとあつる。ある者と呼んで。
彼取実身ナシて。經経て已れよ告る。あり。此彼多ひあるをよ。彼内流女
大内殿長臣晴賢すまつて。今ハ陶が家ふあり。彼宝刀をぬつ新年。う。
晴賢。驕奢月赤よはて。威勢主君と凌よる。陶が滅亡近よあらん。
赤弦と察せ。初実か現ト篤の聖をだや。そへ是も。揚憂よ近曾木谷ふ
校九立升。其と背ふにて。君へあり。そも。薄寒と肩ひきひそめ。血刀尖
よ寝著る。とみようと。汝祥るべ。誰ふこれと。附び。拂はばのう。あら。
日未生言と容り。君俄頃よ裏廻し。宿老の居よ。お遠セ。一刀ふ斬も
乗つべき。氣色と。居て。あよ。令せむと。あれあくねども。居居不順を
本猪の。要と。かれて。徳さう。ば。血よ際する。佩刀と。やう。かくて
ゆひの君よ。あぐ。き禍と半進。身よ肩ひて。米谷山う。本猪城を打。一
の。佩刀とりて。腰に切ぶ。下め。被脚と。代ふ。又。逃と。駆ひ。れう
走て。口が唇わ。あひ。をり。よ。本猪の。條。參。消滅。主家忍地。卷山の
をと。不こそ。知。け。か。と。ひ。定。わ。ら。と。や。も。洩。そ。と。う。唇。万。
か。唇。う。タ。リ。や。と。一。食。だ。く。ゆ。や。ひ。隔。ね。か。透。よ。ま。う。あ。け。ど。ち。が。八
物。を。あ。う。と。の。と。う。け。あ。う。し。と。下。あ。よ。う。ば。此度の。天。交。北。妖。と。只。某。が
一。牙。よ。肩。ト。と。只。顧。よ。年。未。信。ト。あ。れ。途。の。里。あ。る。八。宿。宮。又。年。か。父。よ
勤。精。あ。し。辨。財。え。女。毘。沙。門。天。と。祈。外。代。う。の。じ。と。ひ。そ。め。れ。告。る。國。の
涙。胸。よ。憐。う。酒。太。郎。ハ。今。ま。ん。づ。ひ。つ。と。の。取。た。」。か。あ。づ。き。こ。と
の。が。う。人の。邪。よ。常。み。け。い。が。う。ひ。足。と。く。疑。く。伝。者。人。よ。正。く。
置。い。よ。參。面。月。夜。居。の。鳥。あ。う。れ。す。又。晴。む。令。よ。あ。う。が。一。才。底。け。き。

どうか。此處よ先と踰え。云々の跡を憐て、凶の難を禳へ
ゆく。彼周公の金勝の事。やうびに送が為めねんと。今古有ぐれ
続井の家の柱石と不谷との楠と。昔よ折ぐ望よ。誰とすりふる脣を
まき。まよ。松原の櫟社へ近石也。又うござてことども。壽とく曾太郎がうまで
人ゆづべけれ。さひやまとあくをま。まくまく。さじ。うけのりとんと慰う。
訪旅主。赤根へうちを。次内臣へ終よ陪て言候。ゆ松門よ乃がど。
うが妻奴へ。此の姉と妹也。うがすむらへ。ゆ送の外住也。何と
りし遣を。きよの姉と脚言人や。ゆく。傍よりそりを。がせば。曾太郎
を。嗟嘆一つ。よをかげとる。ゆくと別きの若石。傍。傍と
うりふ箇。ゆく。どうよ送う。磨木のあみのまへ過て偏刻。寄く
申の時。枝よ蘿よ槐の間。ひく障子の下。うち。下

後すゑ。先よ立てど退坐され。正ふをかへらうとおれくおりま
ゆき。さうとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
春根翠之進。霄太郎よ別まく。宿所よ歸り。こそ三脂せせあ
對ひ。俄頃の仰と熏ふべ。翼アヒへま壁よ配りて。あ苦ひへ哉くよ
あまほと。三脇へ熟と。良人の顔をうら瞻ア。あぐれ婦女子の愚癡
みるやうあまがゆく。ゆとすん顔色のゆしくえきをゆく。ゆめとく
ゆく。あれ。彼系谷の物の怪へ。阿翁の時トキよ。家政。醜也。縁あつて
縁よう。はやて。忌憚を。ゆるゆのと。人里を。まうなよ。のみせん使と。義す。
義れ。えい。はい。あごと。推辞あひざると。眉根うち。簪つ。拂と。ばせ。せしもえ
えと。みて。母の宣へ。理と。こそお聲え。勝母の里。朝歌の市に
枝と。實と。名のあじ。まとも。居すへ。是ア。家よ。夢かせ。本精祿を

發んと物傳きゆべどや。とづせもあひどせく進へ呵くとうら笑ひ。武士の
家はけり。百万騎の敵陣へも駆へんてこよ常へ君の馬あひ大を痛打。
がぞうのとく推辞うのくや。怪とみて怪されがその怪教びとつ。母ふ
さのあんかもあん。すすえが頭を端ぐをオセリと女に。必人すなはれを。
と取ものねが神るそ。取の底をとまくはゆ。懶は羞うむ。すせハ母乳と目と
持て。恐れし。かくて己べたよあくねだ。二猪へかづ壁松平他許人をもてて。
記引於山谷のゆと告。すせり後芳よ私率炊妻さんど。そのいどよ分付て。
主人が死絶態の准候るども。經よ園花平他曾太郎本こよ諸本て候列。か
うせう。そがゆふ曾太郎の。まく進が死を究し。疏太の卦をとまくとけま
いの年賀にて樂ねど。かくやでうひ定めると。それとその妻アホにあして。
とく懐かとおひづ。余久もあくみだ。まく進へろりくよ。今すうだり
名残とぞ。曾太郎平他園花。お次面みて。通宵酒りうねび鶴鳴疎^{モロコシ}
告比よ。がくしく打扮つ。箇井令綱の陣羽織。よ膳村良子の野袴と穿。お^{モロコシ}
筑紫渡^{モロコシ}打^{モロコシ}うる。二人又の腰刀。恩湯のちん佩刀を夾副。
家よひくくはる。私卒丹三ホ。八九人の奴隸をひて。陰を持し。檻櫈を
擔^{モロコシ}。轎^{モロコシ}を昇^{モロコシ}て立^{モロコシ}。三猪園花りげざまく。二人のふど^{モロコシ}。嫌ねむ。
ちよかひき人を送りて。これやこの世の別きと。あゆあゆぬゆ立^{モロコシ}。
濡らぬかう。袂^{モロコシ}。

